

音楽を進んで表現する子どもを育てる音楽科学習指導
～遊びを取り入れた活動を通して～

要約

近年、家庭や地域の教育力の低下が問題視される中、いわゆる「小1プロブレム」の指摘がなされている。遊びを通しての総合的な指導を重視している幼稚園教育の特質から、小学1年生でも、遊びの要素を取り入れた学習指導を展開していくことが大切であると考えられる。本学級の子ども達は、音楽の授業の中で歌を歌ったり、音楽に合わせて踊ったりする活動をととても楽しんでいる。しかし、その中でも「音楽はつまらない。」と言っていたM児のように、音楽の楽しさを十分に味わうことができていない子どもも見受けられる。そこで、音楽に合わせて遊ぶ中で音楽の楽しさを感じ、遊びで感じ取ったことや学び取ったことを生かしながら、「こんな音楽にしたい。」という思いを基に自ら表現することができる子どもを育てるために、本主題を設定し、以下のように取り組んだ。

【A 教材を中心とした題材構成】(検証授業1：題材「にほんのうたをたのしもう」)

題材名		にほんのうたをたのしもう(3時間)(1年 教育芸術社)		
配時		1	1	1
学習段階		感じ取る段階	あらわす段階	味わう段階
教材名(曲)		さんちゃんが	おおなみこなみ	おちゃらかほい
共通事項	ア(ア)	旋律	旋律、 拍の流れ	速度、 拍の流れ
	(イ)			
学習形態		個人→ペア→グループ	グループ	ペア→全体

【B 主題を中心とした題材構成】(検証授業2：題材「おとをあわせてたのしもう」)

題材名		おとをあわせてたのしもう(やまびごっこ) (3時間)(1年 教育芸術社)		
学習過程		感じ取る段階	あらわす段階	味わう段階
配時		1	2	
教材名(曲)		やまびごあそび (音楽づくり)	やまびごっこ	
共通事項	ア(ア)	強弱	強弱、 拍の流れ	
	(イ)	問いと答え	問いと答え	
学習形態		ペア	ペア	グループ→全体

その結果、以下の成果(○)と課題(●)を得た。

- 友だちと関わりながら体を動かす遊びを取り入れた学習活動を行うことは、幼稚園教育とのつながりから、音楽の楽しさを味わい、表現を工夫することへの意欲を高めることに有効であった。
- 遊びの中で捉えさせる〔共通事項〕を明確にして工夫する観点を提示したことは、子どもが工夫の仕方を考えやすくなるとともに、題材の目標達成にも有効であった。
- 考えた工夫を表現につなげるための技能面の指導。
- 遊び方を全員の子どもが理解するための時間の保障。

キーワード：遊びを取り入れた学習活動、表現の工夫

1 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

近年、家庭や地域の教育力の低下が問題視される中、いわゆる「小1プロブレム」の指摘がなされている。これは、幼稚園教育から小学校教育への円滑な接続がうまく行われていないことが原因の一つとして挙げられる。このことを受けて、遊びを通しての「表現」「健康」「言葉」「人間関係」「環境」などの総合的な指導を重視している幼稚園教育の特質から、小学1年生でも、遊びの要素を取り入れた学習指導を展開していくことが大切であると考え。また、今日、児童を取り巻く社会や家庭環境の急激な変化という状況を踏まえ、自ら考え行動できる能力や豊かな人間性などの「生きる力」を育成することを目指し、教育改革が進められてきた。この中でも、「豊かな心」を育成のために音楽科の果たす役割は大きい。「豊かな心」を育むためには、美しいものや優れたものに接して感動する等の豊かな感性が必要である。さらに、その感じたことを表現することで他者と楽しみながらコミュニケーションを取ることができる。このように、小学校低学年の段階に、遊びを取り入れた音楽科学習指導を通して表現する力を育て、深めていくことは現代社会の要請に応えることであり、本研究は価値があるといえる。

(2) 学習指導要領(音楽科)の基本方針から

音楽科については、その課題を踏まえ①音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、②音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむことなどが重視されている。また、小学校音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」と学習指導要領解説音楽科編に明記されている。音楽科の学習は、声や音を使って自分の思いや意図を表現したり、想像力を働かせながら音楽を聴いたりする活動を通して、自分の感性を働かせながら音楽活動を展開していく学習である。

そのような音楽の学習で、生涯を通して、生活の中に音楽を生かしたり音楽文化に親しんだりする態度を育てるためには、児童が楽しく音楽にかかわり、音楽を学習する喜びを得るようにすること、すなわち、表現及び鑑賞の活動を通して、活動そのものを楽しんだり、音楽に感動したりするような体験を積み重ねていくことが重視されている。そのために、児童自らが音楽のよさや面白さ、美しさに気づき、音楽活動への興味・関心を膨らませるとともに、友だちとかかわり合いながら、主体的に音楽を学ぶ喜びを味わうような活動の充実が重視されている。

これらのことから、今回の研究では表現領域に焦点を当て、「進んで表現する」子どもを育成しようと考え、本研究主題を設定した。

(3) 子どもの実態から

本学級の子ども達は、音楽の授業の中で歌を歌ったり、音楽に合わせて踊ったりする活動をととても楽しんでおり、30人の子どもほぼ全員が音楽の授業が好きと答

えている。その音楽の活動の中でも、「歌に合わせて友だちと遊ぶ」ことが好きな子どもが28人ととても多く、音楽の授業の中でも友だちと関わりながら活動することを好んでいることがわかる。実際に1学期に学習した題材「うたでなかよしになろう」では、楽曲「ひらいた ひらいた」を友だちと手をつなぎながら歌に合わせて楽しく遊ぶ姿が見られた。また、リズム遊びも好きで、題材「はくをかんじてリズムをうとう」でリズム模倣を行った際、手拍子のリズム遊びだけではなく、手、ひざ、足、頭、隣の友だちと手を合わせるなど、いろいろな組み合わせで簡単なリズム遊びにも多くの子どもが興味を示して取り組み、表現することができた。

しかし、その中でも、「音楽の学習は嫌い」と言っていたM児のように、「音楽はつまらない。」と言って、音楽の楽しさを十分に味わうことができていない子どもも見受けられる。また、友だちとの交流の中で遊びながら体を動かす活動は好きであるが、みんなの前で踊ったり歌ったりすることに抵抗があったり、苦手意識をもっている子どももいる。その理由としては、「恥ずかしいから」というものが多かった。

そこで、音楽に合わせて遊ぶ中で音楽の楽しさを感じ、遊びで感じ取ったことや学び取ったことを生かしながら、「こんな音楽にしたい。」という思いを基に自ら表現することができる子どもを育てるために、本主題を設定した。

2 主題の意味

(1) 「音楽を表現する子ども」について

「音楽」とは、リズム（律動）、メロディー（旋律）、ハーモニー（和声）で構成されるものである。美術などが視覚を媒介するのに対し、音楽は聴覚を媒体として時間的に展開される。音の強弱や高低、色彩、リズム、一定のパターンによる反復や変形などによって形成され、それに込められた意味（思い）を感じる心的な働きがあって音楽は成立するものである。音楽は、自分の考えを表現するのに用いる言語と多くの共通面をもっている。

「音楽を表現する」とは、様々な経験を経て培ってきた感性を働かせて、感じたことや心に描いたことを自らの声や楽器で楽曲の表現を工夫し、思いや意図をもって演奏することである。ここでいう「思い」とは、「こんな音楽にしたいな。」といった音楽をつくることに対する考えや願い、「意図」とは、見通しをもちながら「こんな理由で、こんな音楽にしよう。」といったような根拠を必要とするものである。（「学習指導要領 改訂のポイント（小学校 音楽）平成20年7月義務教育課」より）

音楽を表現するためには、「音楽に対する感性」を育む必要がある。「音楽に対する感性」とは、すなわち「音楽的感受性」と捉えられる。音楽の特性であるリズム感、旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感などの刺激を直感的に気づき（知覚）、それらの働きによって生まれる楽曲の良さやおもしろさ、美しさを感じ取り（感受）、それらを生かして自分の思い（中・高学年では意図も加わる）を基に表現を工夫することである。

「音楽を進んで表現する子ども」とは、特に低学年においては、友だちの歌を

聴いて一緒に歌い出したり、音楽に合わせて体を揺らしながら、恥ずかしがったり躊躇したりすることなく、楽しみながら自分の「こんな音楽にしたい。」という思いを基に自らの声で表現することができる児童である。そこで、本研究では、「音楽を進んで表現する子ども」の姿を以下の3つの姿で捉える。

- 楽曲の気分を感じ取り、「こうしたらよさそうだな。」という思いをもって表現する活動に進んで取り組もうとする子ども (音楽への関心・意欲・態度)
- 「こんなところがいいね。」「ここが好き。」と、楽曲の良さやおもしろさ、美しさに気づき、その楽曲にあら表現するにはどう表現したらいいか考え、工夫する子ども (音楽表現の創意工夫)
- 「もっとこんな音楽にしたい。」という思いから、強弱や速さを工夫して、それを表現できる子ども (音楽表現の技能)

(2) 副主題「遊びを取り入れた活動」について

「遊び」の本質は、幼稚園教育要領解説によれば、人が周囲の環境や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れ、そのかわり合いそのものを楽しむことにある。

その上で、幼稚園教育での「遊び」とは、幼児の成長や発達にとって、意味や関わり方を発見するための重要な体験が多く含まれているものであり、指導の中心に置かれるものである。これは、表現の領域でも「幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうこと」(幼稚園教育要領解説)と明記されているように、遊びとして楽しむ中で表現する楽しさを体感することが重視されているのがわかる。

それに対し、本研究でいう「遊び」とは、目標をもって友だちと関わりながら体を動かし、学んでいく活動のことであり、教育すべき内容を効果的に指導するための手段として捉えることができる。文部科学省の報告においても、「児童期の教育は、教員が教育すべき内容を具体化し効果的な指導を行うことにより、児童が目標に到達することができるようにすることが重要な課題」(文部科学省『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)』)とされている。そのため、小学校では、「遊び」を目的にするのではなく、目標到達のための手段として取り入れていく。

「遊びを取り入れた活動」とは、友だちと一緒に関わりながら体を動かし、感じたことを基に、自分の思いをもって、音楽を形づくっている要素(低学年では、音色・リズム・速度・旋律・強弱・拍の流れやフレーズ等)を工夫することである。

文部科学省の報告によれば、幼児期の教育では、教職員が幼児が遊び込むことができる環境を構築し、幼児の遊びを深めさせる中で、幼児は自分の課題を発見・追求するようになり、課題意識が高まっていくことを目指している。

そして、楽しいことや好きなことに集中すること、いわば遊びに没頭することを通じて様々なことを学んでいくことであり、これは「学びの芽生え」と呼ばれる。一方で、小学校では、学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間の区別が付き、与えられた課題を自分の課題として受け止め、

計画的に学習を進めること、すなわち各教科等の授業を通じた学習は「自覚的な学び」と呼ばれる。

この「学びの芽生え」と「自覚的な学び」に円滑に移行する手段として、「遊び」を取り入れる。その上で、「遊び」自体を目的とするのではなく、捉えさせるべき〔共通事項〕を定め、音楽の具体的な目標に向かって、進んで表現を工夫させるための手段として取り入れることで、音楽への関心・意欲を高めながら、学びを進めることができる考える。

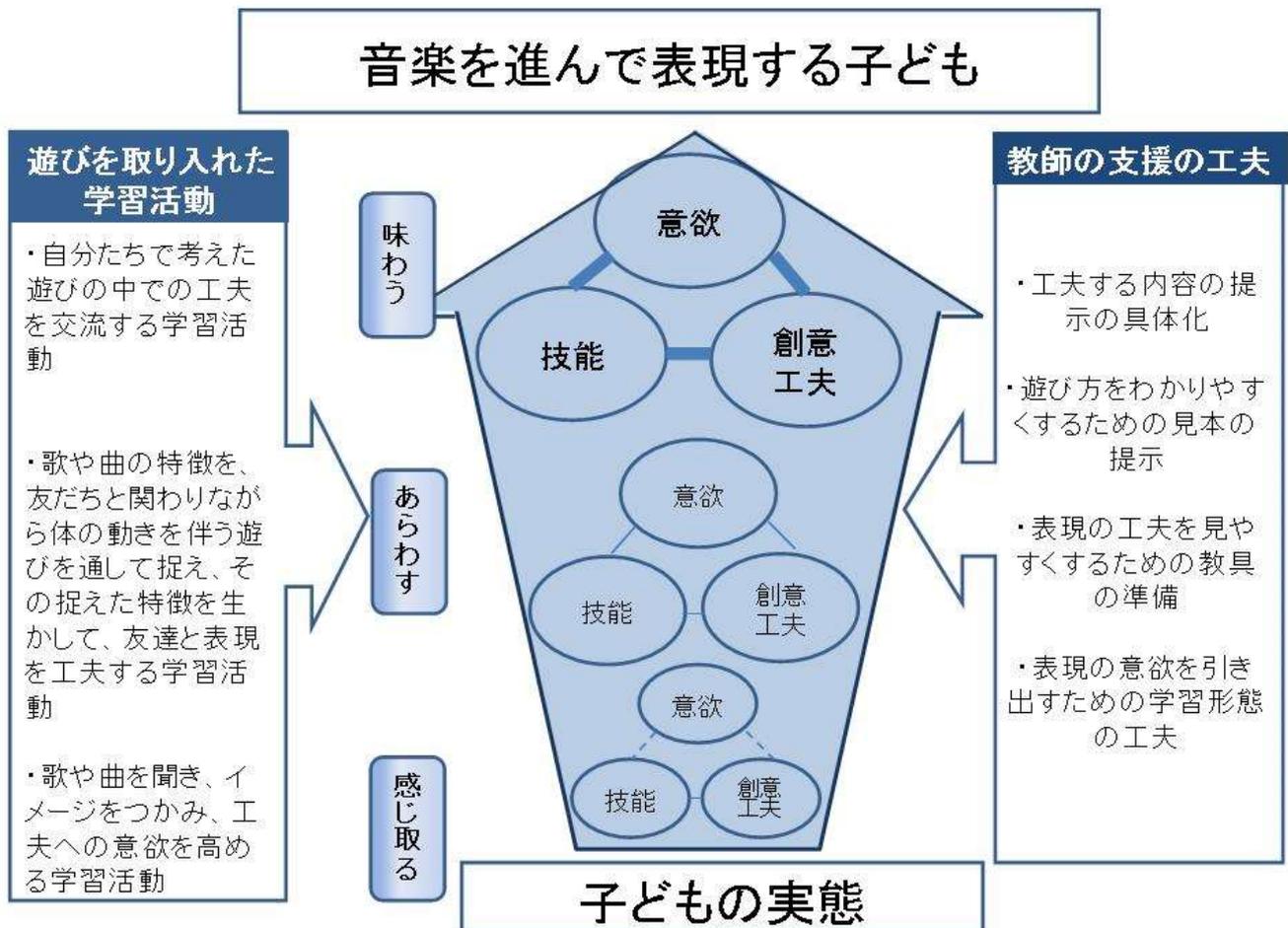
3 研究の目標

遊びを取り入れた学習活動を通して、音楽を進んで表現する子どもを育てるための音楽科学習指導方法を究明する。

4 研究の仮説

遊びを取り入れた活動構成をすれば、音楽の楽しさを感じ、表現に対する自分の思いをもち、それを進んで表現する子どもが育つであろう。

5 研究構想図



6 研究の内容と方法

(1) 題材構成の工夫

遊びを取り入れた活動を通して、音楽を進んで表現する子どもを育てるために、2つのパターンの題材構成を取り入れる。なお、1単位時間の中で捉えさせる〔共通事項〕が複数ある場合は、特に重視する〔共通事項〕を設定する。以下、特に重視する〔共通事項〕を、核とする〔共通事項〕とし、太字で表記する。

【A 教材を中心にした題材構成】

題材名		にほんのうたをたのしもう(3時間)(1年 教育芸術社)		
配時		1	1	1
学習段階		感じ取る段階	あらかず段階	味わう段階
教材名(曲)		さんちゃんが	おおなみこなみ	おちゃらかほい
共通事項	ア(ア)	旋律	旋律、 拍の流れ	速度、 拍の流れ
	(イ)			
学習形態		個人→ペア→グループ	グループ	ペア→全体

1単位時間ごとに教材をねらいに沿って設定する。検証授業1では、Aパターンを使って、「にほんのうたをたのしもう」という題材で授業を行う。

まず、「感じ取る段階」では、「さんちゃんが」という教材で、わらべ歌の旋律のおもしろさを感じ取ることができるようにする。

次に、「あらかず段階」では、「おおなみこなみ」という教材で、拍の流れを感じ、それに合わせて歌いながら動くことができるようにする。

最後に、「味わう段階」では、「おちゃらかほい」という教材で、速度の変化による感じの違いに気づき、自分たちで速度を工夫することができるようにする。

このように、教材によって各段階を独立させて題材を構成することで、その教材ごとにある核とする〔共通事項〕を、十分に指導できると考える。

【B 主題を中心とした題材構成】

題材名		おとをあわせてたのしもう(やまびこごっこ) (3時間)(1年 教育芸術社)		
学習過程 配時		感じ取る段階 1	あらかず段階 2	味わう段階
教材名(曲)		やまびこあそび (音楽づくり)	やまびこごっこ	
共通事項	ア(ア)	強弱	強弱、 拍の流れ	
	(イ)	問いと答え	問いと答え	
学習形態		ペア	ペア	グループ→全体

子どもに身につけさせたい力(主題)を、題材全体の一つの流れを通して設定して、学習活動につながりができるようにする。検証授業2では、Bパターンを使って、「おとをあわせてたのしもう」という題材の中から、「やまびこごっこ」という教

材を取り上げ、互いの声を聴き合って、友だちと声を合わせて歌うことができるようにすることを主題として、題材を構成する。

まず、「感じ取る段階」では、山びこのように真似る面白さを感じ取りながら、問いと答えを捉えさせるようにする。ここでは、主題の中でも、特に互いの声を聴き合うことをねらう。

次に、「あらわす段階」では、「やまびこごっこ」の楽曲の中で、友だちの呼びかけに対し、山びこのように歌って答え、強弱を工夫させた。主題の中でも、友だちの声を聴き合って、歌うことをねらう。

最後に「あじわう段階」では、「やまびこごっこ」の楽曲で、グループで強弱を工夫させる。

(2) 教師の指導・支援の工夫

- 視覚化の工夫
 - ・ 「遊び」をわかりやすくするための遊び方の図の提示。
 - ・ 表現の工夫を見やすくするための教具の準備(強弱カード)。
- 学習形態の工夫
 - ・ 遊びの理解するための活動(個人)。
 - ・ 歌や曲の特徴を捉える・表現を工夫する活動(ペア・グループ)。
 - ・ 考えた工夫を交流する活動(全体)。
- 工夫する内容の具体化。
 - ・ [共通事項]の中から、工夫する内容を提示。
 - ・ 工夫の仕方の例を教師が提示。

本仮説に迫るために、以下のような研究計画を立てて実践した。

5月	・実態調査 ・主題設定	10月	・検証授業1・分析
6月	・実態調査とその分析	11月	・検証授業2・分析
7月	・教材研究	12月	・実践のまとめ・研究の整理と考察
8月	・教材研究 ・構想思案	1月	・研究のまとめ
9月	・指導案作成・審議	2月	・研究の報告

7 研究の実際

検証授業1「にほんのうたをたのしもう」

教材「さんちゃんが」「おおなみなみ」「おちゃらかほい」

① 感じ取る段階(1/3時) 核とする[共通事項](旋律)

まず、わらべ歌に親しむために、「さんちゃんが」の絵描き歌を紹介した。わらべ歌の親しみやすい旋律で、子ども達もすぐに歌を覚えることができていた。歌に合わせて、絵を描きながら遊ぶ際には、子どもが描き方に戸惑うことのないように教師と一緒に絵を描いていった。その後、スムーズに描くことができるようになった段階で、友だちと関わりながら楽しく描くことができるように、班で順に歌いながら描く遊びを取り入れ

た。そうすることで、「もっと早く歌いながら描けるかな。」など、進んで工夫する姿が見られた。

② あらわす段階（2／3時） 核とする〔共通事項〕（拍の流れ）

「おおなみなみ」を歌い、歌いながら回す動きをつけていった。ゆっくりの速さから始め、動きをつけさせることで、拍の流れを感じ取ることができていた。そして、実際に大縄を使って、班で縄跳び遊びをする活動を取り入れた。回す人が歌うという決まりをつくって行った。自分たちでゆっくり歌う工夫をして、拍の流れを感じ取って遊ぶ班が見られた。次時につなげるために、授業の最後には、自分の知っているわらべ歌を交流し合った。

③ 味わう段階（3／3時 本時） 核とする〔共通事項〕（速度）

前時で知っているわらべ歌の中に、手遊び歌の「おちゃらかほい」が出ていたので、「おちゃらかほいをもっとおもしろくして遊ぼう」というめあてをもたせた。

まずは、「おちゃらかほい」の遊び方を確認するために、黒板には、教科書の挿絵を提示し、ゆっくりのテンポで行った。また、〔資料1〕のように、教師の拍に合わせて歩き回り、出会った人と「おちゃらかほい」で遊ぶ活動を取り入れた。この活動で、様々な友だちと関わって遊ぶことができたとともに、速さが変わると感じも変わってくることに気付くことができた。

次に、ペアで「おちゃらかほい」の速度を工夫させた。教師が速度の変化の仕方を例示して、活動に移った。「速くしたほうがおもしろいよ。」「ここだけ遅くしてもいいね。」と速さを変えながら、自分たちにとっておもしろい「おちゃらかほい」の速さを見つけ、〔資料2〕のように、自主的に教科書に書き込む姿が見られた。また、「音楽はつまらない。」と言っていたM児も、〔資料3〕のように、自ら立って、いろんな友だちと速さを変えながら、「もっと速くしてみようよ。」と意欲的に取り組む姿が見られた。

〔考察（○成果●課題）〕

- 「さんちゃんが」の絵描き歌で、班で歌いながら描いて遊ぶ活動を取り入れたことは、子ども達の「もっとこうしたい。」という意欲を引き出すことに有効であった。
- 「おちゃらかほい」遊ぶ中で、ペアで速さを工夫させたことは、速さの違いで感じが変わ



〔資料1〕「おちゃらかほい」をする様子



〔資料2〕速さを書き込んだ教科書



〔資料3〕「おちゃらかほい」をするM児

わかることに気付くことや、楽しみながら取り組むことに有効であった。

- 遊び方が曖昧になっていた子がいたため、遊び方の理解の時間の確保が必要。

実践2 おとをあわせてたのしもう 教材「やまびこあそび」「やまびこごっこ」

① 感じ取る段階（1／3時） 核とする〔共通事項〕（問いと答え）

山に向かって叫んでいる子どもの写真を提示し、山びこの経験を想起させ、「みんなで山びこあそびをしよう」というめあてをもたせた。「やまびこあそび」でまねっこ遊びをする際に、互いの声を聴き合って模倣させるために「声の強さ・口の開け方・顔の表情・体の動き」という模倣する観点を提示して進めていった。この観点を意識させながら「やっほー」や「おーい」等、短い言葉をペアでまねっこ遊びをさせることで、子ども達は楽しみながら互いの声を聴き合うことを意識することができていた。最後に、「やまびこごっこ」の歌を聴かせ、教師対子どもで歌う活動を仕組み、次時への見通しをもたせた。

② あわらす段階（2／3時 本時） 核とする〔共通事項〕（強弱）

「やまびこごっこ」を歌い、「やまびこあそび」でまねっこ遊びをしたときの模倣する観点を想起させた。本時では、より山びこに近づくために、「声の強さに気をつけて『やまびこごっこ』を歌おう」というめあてをもたせた。問い（呼びかけ）と答え（山びこ）の強弱の関係に気付かせるために、「山に呼びかけたら、同じ大きさで声は返ってくる？」という発問をして、自分たちの経験を想起させ、「山びこに近づくためには、答えを呼びかけよりも小さく歌えばいい」ということに気付くことができた。



【資料4】「やまびこごっこ」で遊ぶ様子

そして、ペアで様々な声の強さを考え、「やまびこごっこ」を歌う活動を仕組んだ。子ども達は、友だちと話し合いながら強弱を考え、問いを模倣することができていた。特に、〔資料4〕のように、強く歌うときは大きな動きで、弱く歌うときは小さな動きで表現させ、まねっこ遊びを歌唱の「やまびこごっこ」に取り入れたことで、強弱がわかりやすくなったとともに、楽しく活動することができた。そして、自分たちの考えた強弱を全体で交流させ、互いの強弱の面白さを見つけ合う活動を行った。

③ 味わう段階（3／3時） 核とする共通事項（強弱）

前時にペアで強弱を工夫したことを想起させ、本時では「友だちの考えたいろいろな強さで歌おう」というめあてをもたせた。「山びこは呼びかけよりも小さく」ということを前提に、班に1枚ずつ歌詞の書いたものを配り、それに強弱を示させ、練習をさせた。そして、強弱を示した各班の歌詞を前に提示し、呼びかけ役を考えた班の子ども達、答えをその他の子ども達に歌わせ、まねっこ遊びをさせた。そのことによって、強弱の付け方によって感じが変わることに気づくことができたとともに、強弱に気をつけて歌うことができていた。

〔考察（○成果●課題）〕

- 「山びこあそび」でまねっこ遊びをさせる際に、模倣する観点を提示したことは、互いの声を意識させる上で有効であった。

- 強弱を体の動きで表現させて、まねっこ遊びを「やまびごっこ」の中に取り入れたことは、声の強さをわかりやすく表現し、相手に伝えるために有効であった。
- 考えた山びこの強弱の関係を表現するための十分な場の設定。

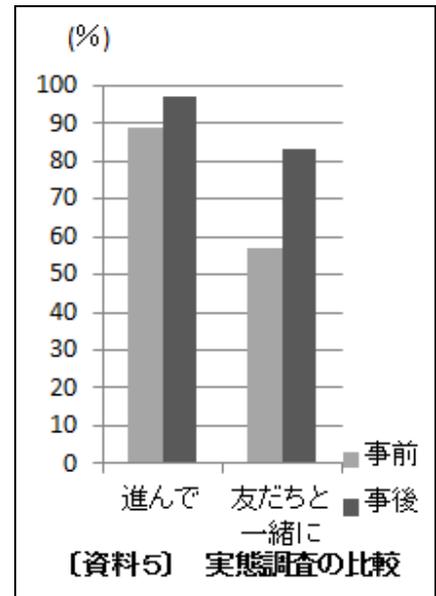
8 研究のまとめ

(1) 全体考察

事前と事後のアンケート結果を比較すると、〔資料5〕のように、「すすんでうたったりえんそうしたりしていますか。」に対しては6%、「ともだちといっしょにうたったり、うたいかたをかんがえるのは好きですか。」に対しては、26%割合が増えているのがわかる。なお、「すすんでうたったりえんそうしたりしていますか。」の項目については、「すすんで」の意味を教師が「こんな風に歌いたいと考えながら、たのしく学習しているか。」という説明を行った。

M児は、事前のアンケートで、「ただ歌うだけでつまらない。」という理由でどちらの項目についても「いいえ」と回答していた。しかし、事後のアンケートでは「友だちと速さを考えるのが楽しかった。

山びこも、もっと答える役をしたかった。」と、どちらの項目についても「はい」と回答している。このことからわかるように、音楽に楽しさを見出すことができいなかったり、恥ずかしさから表現することができなかつたりした子ども達が、音楽を友だちと一緒に関わりながら「こんな音楽にしたい。」という思いを持って表現できるようになってきているといえる。このことから、音楽科の時間に遊びを取り入れた学習活動を行い、楽曲から「もっとこうしたい。」という思いをもつことができるように活動の在り方を工夫したことは有効であった。



(2) 研究の成果と課題(○成果●課題)

- 友だちと関わりながら体を動かす遊びを取り入れた学習活動を行うことは、幼稚園教育とのつながりから、音楽の楽しさを味わい、表現を工夫することへの意欲を高めることに有効であった。
- 遊びの中で捉えさせる〔共通事項〕を明確にして工夫する観点を提示したことは、子どもが工夫の仕方を考えやすくなるとともに、題材の目標達成にも有効であった。
- 考えた工夫を表現につなげるための技能面の指導。
- 遊び方を全員の子どもが理解するための時間の保障。

《参考文献》

- 「小学校学習指導要領解説 音楽編」 平成20年 8月 文部科学省
「幼稚園教育要領解説」 平成20年10月 文部科学省
「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校音楽)」
平成23年 11月 国立教育政策研究所教育課程研究センター
「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」
平成22年11月 文部科学省